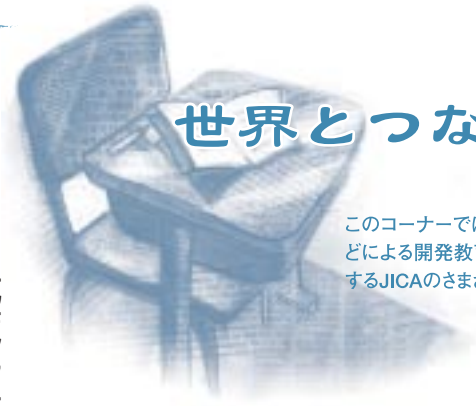


# 世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。



## 体験して実感する 参加型ワークショップ

学校が夏休みに入ってから間もない7月26日の朝、東京都武蔵野市のスイングビルに次々と人が集まってきた。日焼けした顔が多く交じるこの人たちは、小・中・高校の教員たち。



武蔵野市を拠点にフィリピンの孤児院や貧困層への支援を行うNGO、ACTION代表の横田宗さん。支援先の4つの地域の写真を見せ、フィリピンの子どもが一番住みたい地域はどこか参加者に想像させる。世の中にはさまざまな価値観があることに気付く瞬間

25〜27日の3日間、ここで開かれていたのは「夏期教員ワークショップ」。武蔵野市国際交流協会（MIA）が主催する、教員のための国際理解教育実践ワークショップだ。武蔵野市教育委員会や東京都教育委員会、開発教育協会などとともに後援するJICAは、ここで国際協力の情報やさまざまな開発教育支援メニューを提供している。

26日のワークショップは「いいとこ探し」の体験が始まった。5〜6人が1グループになった各テーブルに白い紙が配られると、各人が紙の下に自分の名前を書き、隣の人に渡す。隣の人は名前が書かれた人のいいところを紙の一番上に書き、書いた行が隠れ

るように紙を折る。そしてまた隣に渡す。最後に紙が本人に戻ったとき、紙は自分の長所についていい言葉が書かれている。照れくさそうに「自分もまんざらじゃないな」と笑う参加者。だが、これが国際理解とどうつながるのかわからなかった。「セルフエスティーム（自己肯定感）を高めるための手法です。自分のことをかけがえない存在として認められる人、つまりセルフエスティームが強いほど他者を肯定的に

「いいとこ探し」で紙に書かれた自分の長所を読む参加者。「同様の研修がほかにない」と、夏期教員ワークショップに何度も参加する人もいる

## 第5回 教員が企画・運営する 教員のためのワークショップ

武蔵野市国際交流協会「夏期教員ワークショップ」

東京都武蔵野市では教員のための国際理解教育のワークショップが毎年行われている。学校教育での開発教育・国際理解教育が注目されているが、正しく理解・実践できる人はまだまだ多くない。その実践法を体験しながら学ぶ、教員による教員のための「夏期教員ワークショップ」とは、



とらえ、異なる文化を持つ人々を受け入れる傾向にあります」というファシリテーターの言葉に一同納得する。

この日は、写真教材を使った「フォトランゲージ」などの参加型ワークショップのほか、早稲田大学教授の山西優二さんの講演「国際理解教育とは？」が行われて幕を閉じた。

### ここで学んだ手法を 授業で実践

翌日の最終日。午前中は、武蔵野市に拠点を置く国際協力NGOや、JICA、外国籍児童の学習支援団体など8団体が、運営スタッフとともに活動の紹介と午後に行う分

科会の説明をした。約70人の参加者は7つの分科会に分かれ、午後はフィリピンの民族楽器を演奏したりストリートチルドレンに扮したドラマを演じたりして、各団体が持つリソースを授業にどう活用できるかを考えた。

「このワークショップは、先生たちが国際協力NGOなどと一緒につくっているんですよ。総合司会を務める森井哲也さんが言う。森井さんをはじめとする運営スタッフは、MIAが2000年から年間を通して行っている教員ワークショップの参加者で、現役の教員だ。彼らが「先生が集まりやすい夏休みに集中して国際理解教育が学べる場を」

と企画し、02年から夏期教員ワークショップが始まった。この日の分科会は教員と各団体のスタッフが数カ月かけて準備してきたもので、当日も彼らは共に参加者の疑問などに答えていた。

元MIA職員の杉澤経子さん（現東京外国語大学多言語・多文化教育研究センタープログラムコーディネーター）は、ワークショップ誕生の経緯を次のように話す。「MIAでは市民向けに国際理解講座をやっていたのですが、未来を担う若い人たちが対象にするべきではないかと思い、青年向けや子ども向けのワークショップを始めました。もっと多くの子どもたちに広めたいと思っていたころ学校教育で、総合的な学習の時間」が始まることになり、その柱の一つに国際理解が例示されたため教員からのアプローチが増えてきたのです。問い合わせに応じていると、英語を習ったり外国人から話を聞いたりすることが国際理解教育だと考えている人が少なくなりました。杉澤さんはつながりのできた教員たちと相談し、教員ワークショップを立ち上げることに



青年海外協力隊クイズ。この日協力隊の説明をしたJICA国際協力推進員（東京都）の金子真矢さんは元チュニジア隊員。JICAの分科会でも、協力隊の体験をもとに議論が進められた



「フォトランゲージ」に取り組む参加者。真剣なまなざしで写真を見つめ、そこに何のメッセージがあるか話し合う

大切にしていくのは地元とのつながり。MIAが場を提

供し、教員たちがNGOや在住外国人など地元のリソースと協力して国際理解教育の実践方法を考える、それが教員ワークショップだ。ここに参加した教員の多くが学校にNGOや外国人、青年海外協力隊経験者を招き、ワークショップで学んだ手法を取り入れている。

すべてのプログラムが終わったとき、MIAでこのワークショップを担当する三田善雄さんは「先生たちにはここで得たパワーを子どもたちに伝えてほしい。ニーズがある限り、スタッフとともにこの場を支えていきたい」とあいさつした。今年のワークショップには遠く新潟からの参加者もいた。武蔵野市で始まった取り組みは徐々に広がりをみせているようだ。

### 武蔵野市国際交流協会（MIA）

〒180-0022 東京都武蔵野市境2-14-1スイング9F  
TEL: 0422-36-4511 FAX: 0422-36-4513  
URL: http://www.mia.gr.jp